國語
4L
97
3

[illegible]



L112786
國語


延壽
春水
春蝶
玉兎馬


寿ぐ春や豊年の
津の宮人の
賀
春雨の降るともなく降る
柳かな
永
兼八
春雨や人待つ
柳
永
水
春雨や千代を松の
久漢堂

なびくも
まつをみすまし
ふるやなぎ
はまんまくも
なびく
ぬれそぼつ
ぬれそぼつ
柳川岸の
ばーや
唄女
小春


鎌倉天間町
紙屋治吾

露も今
はや旦の
霞を帯び
美人かな
春の夕の月も
とろ〳〵と
紅顔の
花も

髪結ひに行かうかと言ふ
うつうつと出る
嬉しがらすやまのおきや


うねやまごろく
前人
山強六

第十三回

東都　松亭金水編次

五尺の菖蒲あやめ　みぢかき沃ぐこと美人を賛する唐人の。言葉ふるき。浴衣抱そめて吾妻の

あやめ　すぐれ　ろく　のぞ　ちやう　ありぐさ　こと　おもで

門卸せて稚成水仙隣我窓を覗き〳〵赤面さんざ〳〵

ぞえる　ざ〳〵　いそ　まも　こと　そん

且飛ざ〳〵小まさん物うり　今宵よもすがら　先刻の後に

と来るとそうとお勢は少しキヤ
今けふよりは其気にて居ますまいぞ
もう貴様の事は思ひ切つたから
のものよ
まだ〳〵十三
まるで漫画に出て来る
おとこ
男のやうな
なさる通りを
すまいと云ふ
みんな
何のかのと
あの人
夫も遠慮なく用ふ
こいさん
様も
なんぼ自己の

世話ふなんて。ちっとも有難か無い。坐敷が濕まるとサア好き男をこゝに引き込んで。森閑の内で行灯の具合なんどを見てゐるより。日酒代たんとあつて。花火でも揚げるやうな賑やかな所へ連れて行つて呉れる方が。余程嬉しいわ。それに引き換へ此家の客ときたら。碌でなしの唐変木ばかりで。それも滅多に来ないから。猶更つまらない。可愛さうに。お前さんも。ホンの子供の癖に。毎日毎日。こんな陰気な所に。ぢつと坐つてゐるんだもの。さぞ詰まらないでせう。お母さんは。何処へ行つたの。

お母さんは。今日は。朝から。お客様と。一緒に。出掛けました。

何処へ。

何処へだか。私は。知りません。

嘘をお吐き。お前さんが。知らない筈は。無いぢやないか。

本当に。知りません。

知らないと。言ふなら。それでも。宜いから。早く。此の手を。放して呉れ。

放しても。宜いが。放すと。お前さんは。逃げるから。厭だ。

逃げやしないから。放して呉れ。

逃げないと。誓ふなら。放して遣るが。

誓ふから。放して呉れ。

の物まね
方がおもしろい
まねをする
そうぢゃ。ドレ
ろう
後をもう一つけう。但
す。
羅宇竹。ひ
作へハアおうそうだ
ござろう。
「コレ」の
「ナニ」そこ
「まへ」
ござんす。
うまい
化粧
さう
ひる
みぢかい
さうだ
さうだ
ござる
ござる
ござる

うらぎの妻風情ごとき
ものゝ
ために
ふかく
傷つく
ことを
恥ぢ
ます。
ものの

でゐようとも
ものの
ろうわざ
ちまちらア
おのおの
ふ影だ
ひ治
そうあひろ
まうぶ
ひろハ
ろうぶ
ろうぶ
ろうぶ





ちょっそんが
まる
男の子まいけつ
らまるめ。痛くらいともえんぴまん。ぞ
やうかも。痛くらいともえんぴまん。ぞ
一、あるえんの粒み玉をそれぞれ
ほど おあくの粒み玉をそれぞれ
サテどうもせんのけが。世間み何のも
できまいが。侍らの粒のとうすをまきまして
ちょへ「先生よくよく」

よく

コレサ　いさ
の。　そ　鼻が　法ま　ち
ま　も　神ま　方ー　ち　ア。　そ　ど　る　も
ア　ク　む　ち　ち　ち

すえるが能
治へドレ今あまがすえそうもそうョ。
ひまの
のへ
りそ
ろろ
こ
治「そんなこと言ってもそうは
いまとき
今解けまもョ。
治「まアお帰ぐ
治「そんなこと言ってもそうは
おまが学校。
ろろ
ろろ
ろろ

ろうそくの消ゞまで遊ぶ。
ろうそくの消ゞまで遊ぶ。
ろうそくの消ゞまで遊ぶ。

のど
服さまの内の客人
ゆだる
黄菊のちらく招
ひきあけ
川船ふ。陣
ぎりやう知行と
おまんハ仏方
も祈禱ぐりんぐ。
治らん

第十四回

小まち小路下ル

もらって。初まるくって。
さて
お粉々で どざいまして
しまして
しまうのに 久
儀律ざらうが。
うづ 祭
ぎまして 突当この一番ぶ。
形相 ト図ま 開
ぐくお 滝をお 初
でもありまもう 先刻

けまぢ。そりやアおめへ勘ちがひだ。
きぶくろ（ん）
み（ん）おれが拵るまでもすまいが。
わるまゐ（い）ものだ。
和（わ）らくちやアまいが。
ゴヨ。そりやアおめへ勘ちがひだ。
あるまゐ（い）ものだ。
和（わ）らくちやアまいが。
ゴヨ。そりやアおめへ勘ちがひだ。
あるまゐ（い）ものだ。
和（わ）らくちやアまいが。
ゴヨ。そりやアおめへ勘ちがひだ。
あるまゐ（い）ものだ。
和（わ）らくちやアまいが。
ゴヨ。そりやアおめへ勘ちがひだ。
あるまゐ（い）ものだ。
和（わ）らくちやアまいが。
ゴヨ。そりやアおめへ勘ちがひだ。
あるまゐ（い）ものだ。
和（わ）らくちやアまいが。





世話よ。ちくとそのみぞ。れ。まのごヨ。ごもち　これ
ひき　ひ
引こまる〳〵もる〳〵マアく〳〵おまいト
と　　　

わけ　ひまく
にぶん　ふたり
時分　ちょと
ちょと　ぽかーんとして
あの　ぽかーんとして
でき　まだ
如何　支那
しよう。　姫位
きた。　みんな
多く　居ない
ぢゃ。　つまり
あり　ません
まん　人
ぢゃ　ない。　ぢゃ
ぢゃ　ない　幸ひ　下へ　降
まん　人の　多い　筈。
ぢゃ　ない　ちょと
ぢゃ　ない　私　知つて
ぢゃ　ない　ちょと
ぢゃ　ない　私個　ある
ぢゃ。　妻　側
ぢゃ。　ちょと
ぢゃ。　ちょと
ぢゃ。　ちょと

くさぐさ
紙治さんの家の。女房と
云
お
ふ
ハ
傾
城
こ
よ
ね
と
云
ふ
女
郎
を
く
ど
き
お
と
し
て
ぞ
ん
ざ
い
に
し
て
置
ま
ゝ
の
ば
か
り
で
な
く
。
外
の
女
郎
と
も
通
じ
て
居
ら
れ
る
。
あ
ま
つ
さ
へ
此
の
ほ
ど
は
金
ま
で
つ
か
ひ
込
ん
で
。
内
へ
も
帰
ら
ず
。
こ
ま
つ
て
居
る
。
お
ま
へ
の
ハ
ヤ
ク
帰
つ
て
や
ら
ま
う
と
思
ふ
て
も
。
ど
こ
に
居
る
と
も
知
れ
ず
。
ど
う
も
仕
様
が
な
い
と
。
涙
な
が
ら
に
物
語
り
ま
す
ゆ
へ
。
ア
ヽ
お
ま
へ
の
や
う
な
。
よ
い
女
房
を
持
つ
て
。
ど
う
し
て
あ
ん
な
ア
ホ
ウ
ト
リ
の
様
な
。
ど
う
し
や
う
も
な
い
男
に
。
惚
れ
ら
れ
た
ぞ
い
な
。
ま
ア

そのおりうらの家の紙屋源兵衛が留守中
へ這入り紙屋の金銀を盗んで逃げ去りし
ものなり
ここに又一人の盗人あり同じく紙屋の
留守へ這入りしが金銀の在所を知らざ
れば是非なく帳面ばかり盗み取りて逃
げ去りぬ
かの帳面を盗みし盗人は紙屋の隣家
なる呉服屋の留守へ這入りしが呉服屋
にては金銀ともに多く有りしかば是
幸いと金銀を盗み取りて逃げ去りぬ
かの呉服屋の隣家なる質屋の留守へ
這入りしが質屋にては金銀ともに多く
有りしかば是幸いと金銀を盗み取りて
逃げ去りぬ
かの質屋の隣家なる酒屋の留守へ這
入りしが酒屋にては金銀ともに多く有
りしかば是幸いと金銀を盗み取りて逃
げ去りぬ
かの酒屋の隣家なる煙草屋の留守へ
這入りしが煙草屋にては金銀ともに多
く有りしかば是幸いと金銀を盗み取り
て逃げ去りぬ
かの煙草